

自己モニタリングが英語学習に及ぼす効果について

杉村 藍・武岡 さおり・尾崎 正弘*

The Effects of Self-Monitoring on English Learning

Ai SUGIMURA, Saori TAKEOKA and Masahiro OZAKI

要 旨

近年、学習者の学習意欲の低下が大きな問題となっており、大学入試センターや社団法人私立大学情報協会の調査からもその傾向が明らかになった。しかし、学習意欲に関する調査・研究はその取り組みが始まったばかりであり、効果的な教育指導法の開発までには至っていない。

著者らは、過去に効果的な学習指導法に関する研究やWebを利用した学習教材開発などの研究を実施してきた。それらの研究成果を踏まえ、本論文では、英語教育において、学習者が自己の学習能力を把握しながら学習を進める「自己モニタリング学習」の実験を実施した。

その実験結果から、学習者が学習過程において自らの学習レベルを把握する「自己モニタリング学習」を実施することにより、学習成績の向上が認められた。ただし、小テストにおいては「自己モニタリング学習」の具体的な効果が認められたものの、学期末テストでは確実な効果を認めるまでには至らなかった。今後、同様の実験を繰り返し、より具体的な成果を確認するとともに、実際の授業に適用できるような、英語教育における効果的な教育指導法を開発したいと考えている。

はじめに

近年、小・中・高等学校から大学に至るまで、学習者の学習意欲の低下が大きな問題となっている。大学入試センターが実施した国立大学における「学力低下の具体的な内容」の調査¹⁾では、第1位に「自主的、具体的に課題に取り組む意欲が低い」(全体：239学部(84.8%)、文系93学部(81.6%)、理系：137学部(86.7%))が挙げられている。また、社団法人私立大学情報協会の調査²⁾でも教員が「学生に関する問題点」として、「基礎学力が無い」(大学：60.1%、短大：66.0%)、「学習意欲が無い」(大学：40.4%、短大：37.7%)と他の項目を引き離して大きな問題となっている。しかし、学習意欲に関する調査・研究については、各教育機関においていろいろな試み^{3)・5)}が行われているものの、効果的な教育指導法の開発までには至っていない。

著者らは、効果的な学習指導法に関する研究やWebを利用した学習教材開発など、過去にお

*中部大学経営情報学部

いていろいろな研究^{6)・9)}を実施してきた。それらの成果を踏まえ、学習者自らが自己の学習状況を管理し、自分の学習能力を把握しながら学習を進める自己モニタリング学習の実験を行っている。

その1つに、四年制大学において、多人数講義科目を受講する2クラスを実験群と統制群に分け、実験群は自己モニタリング学習を行い、統制群は通常の講義のみを行ったところ、期末テスト(講義内容に関する部分)の平均点に関して実験群には有意差がみられた。特に、実験群で毎回実施した講義後の小テストに関する自宅学習(学習内容の復習、自己確認 自己確認票への小テスト結果や復習内容の記載 など)を例に取ってみると、毎回実施している学生とそうでない学生とでは、期末テストの平均点(自己確認票に正しく記載したもの:平均点53.3、標準偏差6.96、3箇所以上の誤記入があるもの:平均点45.8、標準偏差11.76)に明らかな有意差が認められた。

この実験結果から、毎回実施した小テストによって学生が自分の理解できない箇所を把握し、自主的にその都度確認作業を進めていくこと、つまり学習レベルを自ら把握することにより、学習成績の向上が認められた。

本稿では、前述の自己モニタリング学習による実験効果を確認するために、実験手法の異なる英語学習においてその学習効果に関する実験を試みた。そして、多人数講義科目において学習効果を上げた自己モニタリング学習が、少人数クラス編成の演習科目である英語学習においてはどのような学習効果を得られるかを分析した。

特に英語学習は、海外経験の有無や日常生活における英語の使用頻度など、他の教科に比べて学習者の生活体験が学習効果に影響を与え得ると考え、前期授業開始時に事前アンケート、事前テストを実施し、学習者が英語学習にどのような興味を持ち、過去にどのような学習体験をしているかを合わせて調査した。

実験方法

本実験では、一年間を通じ、前期・後期に分けて実験を行った。前期授業では通常の英語授業と毎時間終了時の小テストを実施し(以下、「前期学習」)後期授業では通常の授業と小テストに加え、小テストで不正解だった問題の復習を義務付け、さらにそれらの記録を取るという自己モニタリング学習(以下、「後期学習」)を実施した。これにより、通年の授業の中で、同じ学習者に対して二つの学習方法が理解度にどのような影響を与えるかを調査した。

なお、受講者は前期授業、後期授業を通して基本的に同じであるが、海外留学等のため、後期受講生数が一部変わっている。

(1)学習実験の手順

以下に前期学習と後期学習の具体的な手順を示す。後期学習で実施した自己モニタリング学習は、小テストにおける正答数、誤答数の把握だけでなく、不正解だった問題の復習や自主的に学習した箇所についても毎回記録を取ることが義務付けられている点が前期学習と異なる。こうした記録を取ることによって学習者が自らの学習状況や理解度を把握し、それが学習結果に反映することを期待した。

(2)前期学習について

前期学習は通常の授業形式であり、その詳細を以下に示す。

実験期間:2004年度前期(4月~7月)

実験日時：火曜日 3・4 時限 (10:40~12:10)

被験者：名古屋女子大学短期大学部英語科 1 年次 39 名

授業科目：Reading 1 a (必修科目)

利用教材：Ken Methold, Gillian Flaherty, Heather Jones, Barbara Pepworth,
Stories to Tell Again (MACMILLAN LANGUAGEHOUSE, 2001) Level 4

実験方法の詳細：

(A) 毎回授業終了時に授業内容の復習を兼ねた小テストを実施。問題は授業内容に関するもの10問、同レベルの応用問題10問の合計20問。

(B) 解答後、解説付きの正答表により、学生自身が小テストの自己採点・自己確認。

(C) 小テストで誤解答した問題について復習することを指示するが、義務付けない。

実験手続き：

(A) 授業開始時

事前アンケート調査、事前テストの実施。授業内容、授業目標、評価基準等についての説明。小テストの結果を記入する「確認票」についての説明。

a) 毎回小テストを実施する。その結果を「確認票」に記載して提出すること。

b) 小テストの結果、誤解答した問題は再度確認しておくこと。

(B) 毎回の授業

授業終了後に小テストの実施。自己採点と「確認票」の記入、提出。

(C) 最終授業 (期末テストの実施)

(3)後期学習について

後期学習では、以下のように自己モニタリング学習の実験を実施した。

実験期間：2004年度後期 (9月下旬~1月)

実験日時：火曜日 3・4 時限 (10:40~12:10)

被験者：名古屋女子大学短期大学部英語科 1 年次 34 名

授業科目：Reading 1b (必修科目)

利用教材：Ken Methold, Gillian Flaherty, Heather Jones, Barbara Pepworth,
Stories to Tell Again (MACMILLAN LANGUAGEHOUSE, 2001) Level 4 (継続)

実験方法の詳細：

(A) 毎回授業終了時に授業内容の復習を兼ねた小テストを実施する。問題は直接授業内容に関するもの10問、同レベルの応用問題10問の合計20問。

(B) 小テストの解答後、解説付きの正答表により、学生自身が小テストの自己採点。

(C) 小テストの正答数、誤答数を「確認票」に記入。復習問題10問と応用問題10問についてそれぞれ分けて「確認票」に記入。

(D) 誤解答した問題について復習することを義務付け、自分で復習して確認した数、そのうち理解できた数を記入。

(E) さらに、自主学習として発展的に学習した場合はその項目についても記入。

(F) 「確認票」(提出)と同じ内容を、「確認シート」(自己管理)に記入。

(G) 自主学習により復習した結果を記入した「確認票」を翌週授業時に提出。

実験手続き：

(A) 授業開始時

授業内容、授業目標、評価基準等についての説明。自己モニタリング学習について説

明。「確認票」および「確認シート」の説明。具体的には、

- a) 毎回小テストを実施する。その結果を「確認票」に記入して次回の授業で提出。
- b) 小テストの結果、誤解答問題は必ず次週までに確認を行い、さらに発展的に学習した場合はその内容についても記入すること。
- c) 小テストの結果や学習内容の理解度を把握・自己管理するために、「確認シート」を配布するので、これに「確認票」の内容を転記し、各自保管すること。
- d) 「確認シート」は各自で責任をもって保管し、最終授業時に提出すること。この「確認シート」の保管は自己管理能力を示すもので、原則として再発行しないので、各自できちんと管理すること。

(B) 毎回の授業

授業終了時に小テストの実施。学生による自己採点。「確認票」は持ち帰り、復習や自主学習の結果を記入。「確認シート」に転記後、翌週授業時に「確認票」を提出。

(C) 最終授業(期末テストの実施)

前回授業時の確認票と、確認シートの提出。

事前アンケートの結果について

前期学習を受講した学生39名と、後期のみ受講した4名の合計43名に対して、英語に関するこれまでの経験や英語学習における取り組み、今後の目標などに関する調査を実施した。

(1)英語関係の資格について

受講者がすでに取得している英語関係の資格を表1に示す。受講者の大半が大学入学時まで何らかの資格を取得しており、資格を取得していない者は7名(16.2%)であった。

また、在学中に取得したい資格を表2に示す。全員が何らかの資格を取得したいと回答しており、表1と表2を比較すると、ほとんどの受講生がより高いレベルの資格取得を目指していることが分かる。

表1 英語関係の取得資格

資格	レベル	人数
英検	2級、準2級	18
	3級、4級	20
	計	38
TOEIC	500以上	1
	500未満	3
	計	4
全商英語検定	2級	4
CHAT		1
なし		7

(複数回答)

表2 在学中に取得したい資格

資格	レベル	人数
英検	準1級	10
	2級、準2級	35
	計	45
TOEIC	700以上	5
	500以上	15
	その他	7
	計	27
TOEFL		1

(複数回答)

(2)英語を学び始めた時期

受講者が英語を学び始めた時期については、中学から英語を始めた者が19名(44.1%)、小学校高学年からが18名(41.8%)であった。それ以前から英語を学んでいた者は6名(13.9%)と少ない。

(3)海外経験の有無

海外経験の有無については約半数の22名(51.2%)が海外経験がなかった。海外経験が1~2回が13名(30.2%)、3~4回が3名(7.0%)であったが、5回以上の者はいなかった。一方、半年以上の滞在経験がある者は5名(11.6%)いた。

(4)英語メディアの利用について

普段の生活の中で、どの程度英語に触れているかを確認するため、英語の歌の鑑賞と、英語放送(映画、ドラマ)の視聴について調べた。英語の歌の鑑賞については「非常によく聞く」が11名(25.6%)、「よく聞く」が15名(34.9%)、「時々聞く」が12名(27.9%)、「あまり聞かない」は5名(11.6%)であった。

英語放送の視聴については「非常によく見る」が7名(16.3%)、「よく見る」が18名(41.9%)と、こちらも過半数が英語放送をよく視聴していた。「時々見る」が10名(23.2%)、「あまり見ない」が6名(14.0%)で、「見ない」と回答した者も2名(4.6%)あった。全体として、英語メディアへの関心が高い。

(5)高校時代の英語授業について

高校での週当たりの英語の授業回数については、週に5回以上の授業があったと回答した者が22名(51.2%)と最も多く、4回が11名(25.6%)、3回が8名(18.6%)、2回が2名(4.65%)であった。週当たりの英語授業時間数が少ないと解答したものは、商業高校や農業高校の出身者であり、カリキュラムの関係で英語の授業時間数が制限されることがあるためであろうと推測される。しかし、過半数の受講生が週5回以上と回答しており、英語科を志望する場合はやはり高校時点で一定程度の授業時間数が確保されているケースが多いと考えられる。

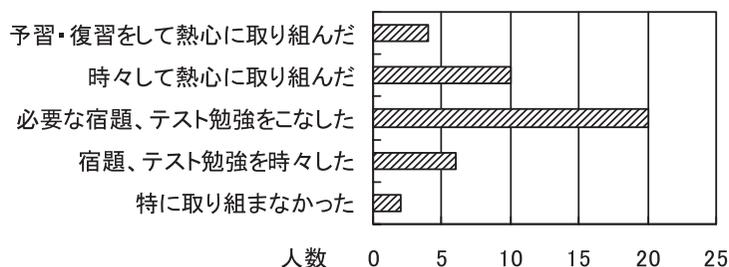


図1 英語授業への取り組み(高校)

図1は高校時代の英語の授業に対する取り組み方を示したものである。「必要な宿題、テスト勉強をこなした」が20名(46.5%)で最も多かった。また、「予習・復習をして熱心に取り組んだ」が4名(9.3%)、「(予習・復習を)時々して熱心に取り組んだ」10名(23.3%)と、全体の約3割が熱心に取り組んだと回答している。しかしその一方で、「宿題、テスト勉強を時々した」が6名(14.0%)、「特に取り組まなかった」が2名(4.7%)と、全体の約2割があまり熱心に取り組んでいない。

(6)伸ばしたい英語力について

前期学習でどのような英語力を伸ばしたいと考えているかを図2に示す。「会話能力」40名(93.0%)が最も多く、受講者のほぼ全員がこの力を伸ばしたいと回答している。対象授業がReadingと読解力を養成するための授業であったにもかかわらず、このように会話能力に対する要望が強かったのには、昨今のコミュニケーション志向が如実に表れているといえよう。続いて対象授業の内容に最も関連する「読解力」が28名(65.1%)、そのほか「文法力」が23名(53.5%)、「書く力」が22名(51.1%)と、全般に高い数字が示されている。この結果から、受講者の半数以上が「どの英語力についても伸ばしたい」と意欲的に考えていることが分かる。

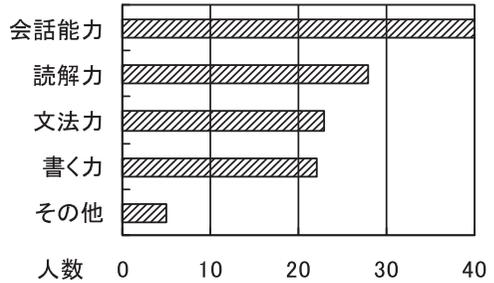


図2 前期学習における目標(複数回答)

(7)授業への取り組みについて

前・後期学習でどのようなことを目標にしているのかを図3に示す。「基礎を確認し、長い英文に(慣れていきたい)」が26名(60.4%)と最も多く、「実力を伸ばし、少し難しいものにチャレンジ」が21名(48.8%)、「ネイティブと同じ新聞・雑誌などを読めるように」が20名(46.5%)と、多くがこれまでよりも少し高レベルなものに挑戦したいという意欲がみられた。一方で、「基礎をしっかりとマスターしたい」と望む者も11名(25.6%)いた。

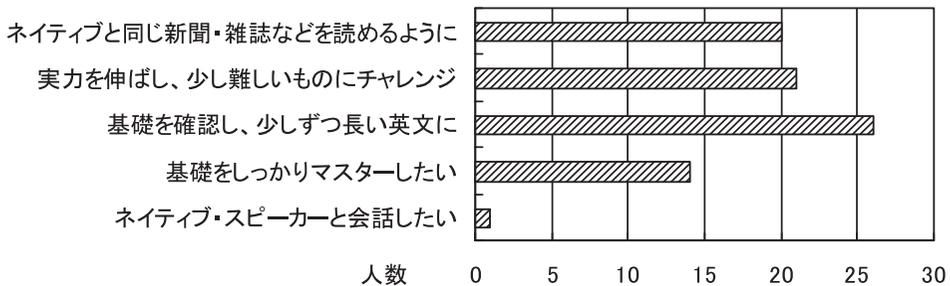


図3 前期学習における目標(複数回答)

(8)授業以外での英語学習について

授業以外での英語学習への取り組み方については、「英語放送(テレビ、ラジオ、映画など)を視聴する」が28名(65.1%)と最も多く、「英語教材(問題集、ビデオ、CD-ROMなど)で個人学習」が9名(20.9%)、「英会話学校・英語塾に通う」が4名(9.3%)、「英語の新聞・雑誌を読む」が3名(7.0%)の順であった。

事前アンケートとテスト結果の分析

英語学習では、他の授業科目に比べ、日常生活での英語の使用頻度、海外経験などが学習能力に大きな影響を与えるものと考え、前期授業開始時に事前アンケートと事前テストを行った

が、それらの結果と前期末テストとの比較・分析を試みた。ただし、ここでは後期学習のみ受講した4名のアンケート結果を除く。

(1)事前テストと前期末テストの結果

前期学習で実施した事前テストと前期末テストの結果を比較したところ、事前テストは平均点55.7、分散が88.7であり、前期末テストは平均点75.9、分散239.4であった。事前テストはこれから学習すべき前期学習と後期学習の学習内容が含まれていたため、前期末テストの得点と比べ、かなり低い値を示した。前期末テストは、前期学習において学習した内容の確認テストであり、テスト範囲も予想されており、平均点が高くなることも予想できたが、平均点が75.9点と予想以上に高得点であった。

(2)英語の学習経験とテスト結果について

英語の学習を始めた時期や海外経験の有無とテスト結果を比較した。まず、英語学習を開始した時期を中学から学習し始めたグループと中学以前に学習を始めたグループとに分け、テストの得点を比較した。

事前テストの結果は、中学から学習を始めたグループは平均点57.1、分散129.9、中学以前から学習していたグループは平均点54.1、分散66.6であり、前者は得点のばらつきが大きく平均点について有意差は認められなかった。(t=0.99、p>0.05)

期末テストの結果は、中学から学習を始めたグループは平均点73.2、分散214.0、中学以前から学習していたグループは平均点76.7、分散305.3であり、事前テスト同様に有意差が認められなかった。(t=0.67、p>0.05)

これらの結果から、中学以前からの英語学習は学習目的が英会話などと限定的であり、また開始時期が早い場合は遊びを取り入れた導入的な内容が多いことが考えられ、英語学習の開始時期が必ずしも前期学習の結果に影響しなかったものと思われる。

次に、海外経験が1回以上あるグループとないグループとに分け、結果を比較した。事前テストでは、海外経験があるグループは平均点52.7、分散56.4であり、一方、海外経験がないグループは平均点57.8、分散118.1となった。また、期末テストでは、海外経験のあるグループは平均点72.2、分散237.4、海外経験のないグループは平均点77.7、分散280.9となった。

これらの比較から、海外旅行や海外生活を体験した受講者の方が事前テストと期末テストの結果が低くなるという結果になった。海外経験のなかには英語圏以外への短期観光ツアーも含まれており、期待したような得点差に結びつかなかった原因の1つであると考えられる。こうした海外経験は、英語や英語圏の文化・生活に対する関心を高める、その結果進路として英語関係の学科を選択するといった動機付けとして作用している部分が多く、それがさらに英語力の向上に端的に結びつく段階には至らなかったと思われる。

(3)英語の歌・ドラマの視聴とテスト結果について

英語の歌についてよく聞くグループとそれ以外のグループに分け、比較した。その結果、事前テストは、よく聞くグループは平均点56.4、分散52.2、一方、聞かないグループは平均点53.9、分散151.7であり、平均点について有意差は認められなかった。(t=0.81、p>0.05) 期末テストでは、よく聞くグループは平均点75.3、分散294.9、聞かないグループは平均点75.0、分散235.0であり、こちらも平均点について有意差は認められなかった。(t=0.05、p>0.05) よく聞くグループにおける事前テストの得点分布では比較的まとまりがあるものの、前期末テストでは得点の分散が大きく、よく聞くグループでも得点分布に幅広いばらつきのあることが分かる。

英語の映画やドラマについても同様に、よく見るグループとそれ以外グループ(「あまり見な

い」「見ない」と回答)とに分け、比較した。事前テストでは、よく見るグループは平均点55.8、分散46.5、それ以外のグループは平均点54.7、分散162.6であり、平均点について有意差は認められなかった。(t=0.365、p>0.05) 期末テストは、よく見るグループは平均点71.5、分散406.2、それ以外のグループは平均点79.0、分散93.8であり、やはり平均点について有意差が認められなかった。(t=1.468、p>0.05)

英語の歌や映画・ドラマは、メロディやストーリー、映像といった要素が加わることで学習者には親しみやすく、また強い興味を示し得る教材である。しかし、歌詞や台詞には口語的な表現が使われていることも多く、文章で書かれた内容を読みこなすReadingという学習内容に必ずしも直接的にその成果が反映されないという面がある。また歌の場合、歌詞の意味内容を考えずに単に楽曲として聞き流していたり、映画・ドラマにおいて台詞の理解を日本語字幕に頼ったりしている場合は英語の学習効果は当然低くなる。そのため、学期末テストの得点の分散に非常に大きなばらつきが見られることも考え合わせると、英語の歌や映画・ドラマの視聴は学習者の接し方が多様であり、そのため直接的に学習成果に結びつかなかったものと考えられる。

以上のように、海外経験の有無や英語の歌や映画・ドラマの視聴など、教室外での英語経験が英語学習にどのような影響を与えているかを分析した結果、英語と接する機会やメディアなどの多様化もあり、今回の調査では必ずしも具体的な差を示すことができなかった。

学習実験の評価

事前アンケートと前期学習について、受講以前の英語に関する体験が学習成果に反映されているかどうかを分析した結果、受講者の学習体験が必ずしも前期学習の成果に結びついていないことが分かった。むしろ、受講者の授業への取り組みや意欲が直接的に学習成果に結びつくのではないかと考えられる。

本実験授業では、学習者の取り組みや意欲を自己モニタリング学習という実験により明らかにしようと、前期学習(通常授業)に続く後期学習において自己モニタリング学習の実験を実施した。後期学習における自己モニタリング学習の実験授業では、従来、教員が学習指導の一環として管理していた受講者の学習成績の管理を、受講者が行うことにより学習者自身に学習状況を把握させ、それが学習意欲の向上に結びつくことを期待した。

具体的には、学習者は授業終了時に実施した小テストにおいて誤解答した箇所を確認し、それを次回の授業までに復習・確認するとともに、その結果を記録させて学習者自身に自己管理することを義務付けた。

以下に、自己モニタリング学習の実験の分析結果を述べる。

(1)前期学習と後期学習の結果について

通常授業を行った前期学習と自己モニタリング学習実験を実施した後期学習におけるテスト結果を図4に示す。前期学習の前期末テストは平均点75.9、分散239.4、後期学習における後期末テストは平均点80.3、分散100.1であり、後期学習の結果が前期よりも少し高いと思われるが、平均点の有意差は認められなかった。(t=1.320、p>0.05)しかし、学習が進むにつれ学習内容が難しくなることを考えると前期学習よりも後期学習の方が、より学習成果が得られたと考えられる。ただし、図4から前期末テストの得点分布(分散:239.4)にはばらつきが大きいこともあり、今後、さらに分析する必要がある。

図5は、前期学習における各テスト結果の分布を示す。図から、事前テストは低い得点分布(平均:55.7、分散:88.7)であり、小テストの得点分布は平均点67.0、分散100.0、前期末テストは平均点75.9、分散239.4であった。それらから、前期末テストは明らかに事前テストの平均点と比較して有意差がある($t=7.15, p < 0.01$)と考えられるが、前期末テストと小テスト($t=3.29, p < 0.01$)、事前テストと小テスト($t=4.87, p < 0.01$)においても明らかな有意差が認められ、事前テストが他のテストと比べ、出題範囲も広範囲であり、受講者にとって英語の実力が試されるような比較的難しい問題であったと考えられる。その結果、事前テストの平均点が他の2つの平均点に比べ、低くなったと考えることもでき、さらにその内容を詳しく分析する必要がある。

図6は、後期学習における各テストの得点分布を示す。図から、後期末テストは平均点80.3、分散100.1、小テストは平均点69.2、分散37.0であり、後期末テストと事前テストは平均点において明らかな有意差が認められた。($t=10.32, p < 0.01$)しかし、後期末テストと小テスト($t=5.38, p < 0.01$)、事前テストと小テスト($t=6.91, p < 0.01$)においても明らかな有意差が認められ、前期学習と同様に、その内容を詳しく分析する必要がある。

ただし、事前テストの比較において、前期学習の各テストと後期学習のテスト結果では、後期学習の結果の方がt検定の値が大きく、後期学習における自己モニタリング学習実験の効果があつたものと考えられる。

(2)小テストの結果について

前期学習では毎授業時間終了時に小テストの実施、自己採点、得点結果の報告をさせ、後期学習(自己モニタリング学習)では小テストの実施、自己採点、小テストの結果を踏まえて自己学習、誤解答箇所の確認と理解、

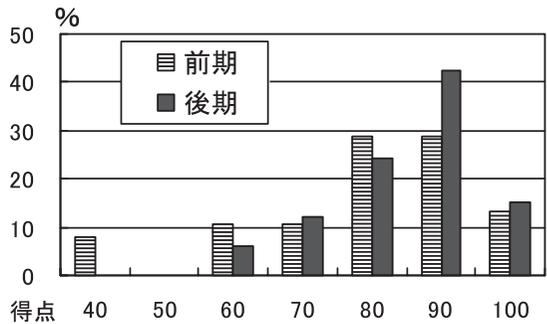


図4 前期・後期末テストの結果

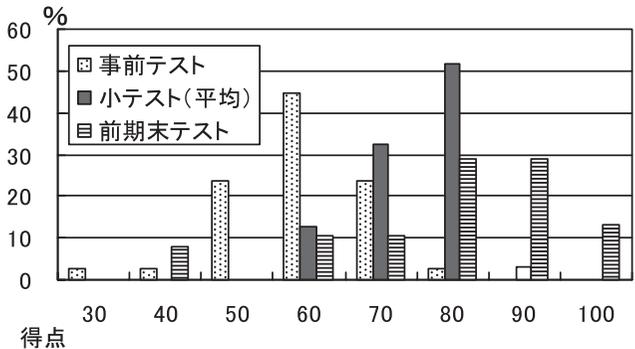


図5 前期学習の結果

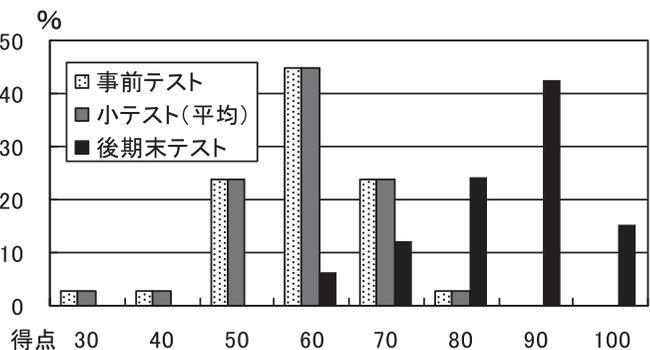


図6 後期学習の結果

その結果の記録と報告を義務付けた。こうした学習方法の違いが小テストの結果にどのような影響を与えているかを分析した。図7は、前期学習と後期学習における小テストの平均正答数の推移を示す。ここで前期学習の小テスト回数は11回、後期学習の小テスト回数は14回である。

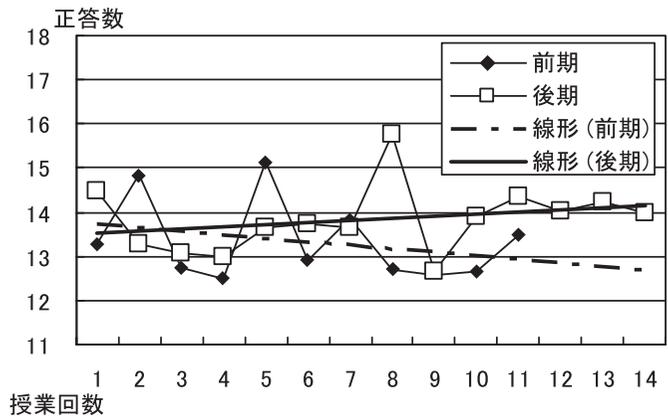


図7 平均正答数(小テスト)の推移

図から、前期学習では授業が後半に進むにつれ、平均正答数のばらつきが大きくなるとともに平均正答数が減少する傾向(線形(前期)参照)が見られ、学習者にとって学習内容が難しくなっていることが分かる。

しかし、後期学習では授業が進むにつれて、ばらつきはあるものの、平均正答数に右肩上がりの傾向(線形(後期))が見られた。後期学習でも授業が進むにつれて学習内容が難しくなっている。しかし、後期学習では前期学習と異なり、授業進行に伴って平均正答数が安定した増加傾向にあることは、自己モニタリング学習の成果と考えることもできる。

小テストの問題数は全20問で構成し、10問はその授業時間に学習した内容の復習問題であり、残り10問はそれ以外の実力問題である。図8は、後期学習における小テストの復習問題と実力問題の平均正答数の推移を示す。図から、復習問題の正答率は高く、後半に向かうほど正答率が安定する傾向が見られ、自己モニタリング学習の効果ではないかと考えられる。

他方、実力問題では授業全体にわたり、正答数は半数程度であり、学習者にとって難しい問題であることが理解できる。

図9は、後期学習の小テストについて、各授業時間に誤解答した問題の確認と理解した平均数の推移を示す。受講者のほとんどが全ての誤解答を確認して復習・理解したのと考えられる。このことは、毎授業時間に提出させる小テストの「確認票」と最終授業に提出させた自己

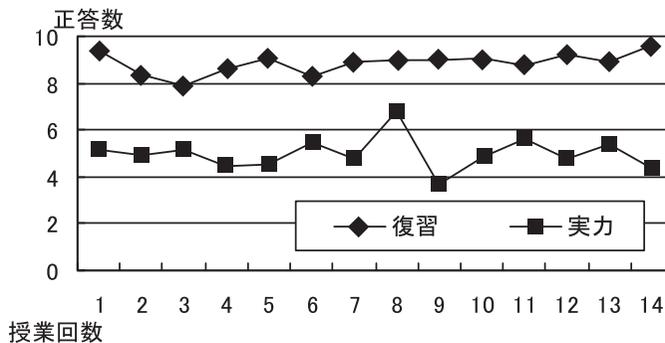


図8 後期学習における小テストの平均正答数(復習・実力)の推移

管理のための「確認シート」からも窺い知ることができる。

図から、小テストの誤答問題の平均確認数の推移と平均理解数の推移がほぼ等しく、これにより小テストの平均正答数が右肩上がり（図7の線形（後期）を参照）になったと考えられ、学習者に自己モニタリング学習が徐々に理解されてきたものと判断できる。また、確認した問題数のほと

んどが実力問題である。そのような授業内容を越えた学習内容は、一般的には敬遠される傾向にあるが、図から判断する限りそのような傾向は見られない。それらの点を考えると自己モニタリング学習の実験は、一定の成果を挙げているものと思われる。

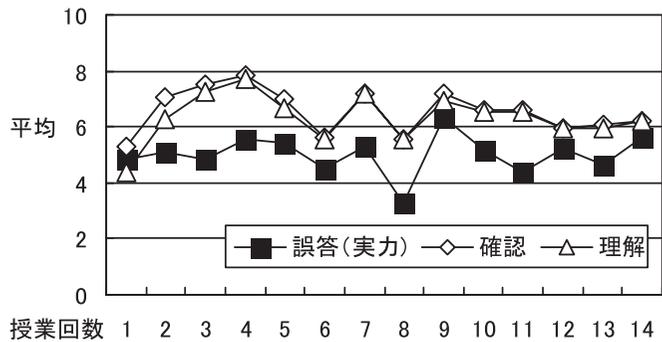


図9 後期学習における小テスト（誤答・確認・理解）の推移

おわりに

海外体験の有無や英語の歌や映画・ドラマの視聴など、受講以前の英語体験が学習成果に反映されているかどうかを分析した結果から、受講者の学習体験が必ずしも学習成果に結びついていないことが分かった。ただし、そのような英語体験が学習成果とまったく無関係であると断言することには問題があり、そのような学習体験が英語学習に生かせるような学習指導の方法を考慮することも必要であると考えます。

我々が行ってきた過去の実験や本論文の実験成果から、むしろ受講者の授業に取り組む意欲が学習成果に結びつくものと考えられ、その意味でも本論文で提案した自己モニタリング学習は、学習者に学習意欲をもたらす教授法として有効であると考えます。

著者らが実施した自己モニタリング学習の実験は、自己の学習内容を学習者自らが把握しながら学習を進めるために、今後、それを支援するための学習指導法を開発することが必要である。著者らは、異なる視点から過去3回にわたり自己モニタリング学習の実験を繰り返し、それぞれ過去の実験結果から研究成果を積み重ねている。今後、さらに実験を繰り返してより多くの分析データを採取し、学習者に対して効果的な学習指導法を提案することを目標としている。

今後は、それらの結果から実際の授業科目にも適用できるようにマニュアル化することを検討していきたい。また、英語学習における自己モニタリング学習の研究成果は、単に英語学習に限らず、他の授業科目にも適用することを期待できるのではないかと考える。

参考文献

- 1) 「学力低下の具体的内容について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/pdf/10-2.pdf)
- 2) 「平成16年度私立大学教員の授業改善白書」(<http://www.juce.jp/hakusho2004/>)

- 3) 植木理恵:「自己モニタリング方略の定着にはどのような指導が必要か 学習観と方略知識に着目して」
(教育心理学研究、2004、52、pp.277-286)
- 4) 若松養亮、大谷宗啓、小西佳矢:「小・中学生における学習の有効性認知と学習意欲の関連」(教育心理学研究、2004、52、pp.219-230)
- 5) 市川伸一:「学習動機の構造と学習感との関連」(日本教育心理学会第37回総会発表論文集、1995、pp.177)
- 6) 小谷津孝明、尾崎正弘、鈴木恒男、湯本典子:「認知的理解学習モデルの構築とCAIシステムへの応用」
(平成4・5年度文部省科学研究費補助金報告書一般研究費(B)(04451028)、1994.3)
- 7) 尾崎正弘、杉村藍、足達義則:「学習者の自己管理が学習に及ぼす影響について」(中部大学経営情報学部論集、2005、19、pp.67-82)
- 8) 橋本信也、尾崎正弘、小山幸治、武岡さおり、足達義則:「学習者の知識や能力が『情報教育』に与える影響について」(日本教育情報学会第21回年会論文集、2005、pp.180-183)
- 9) 川田博美、武岡さおり、田口継治、杉村藍、尾崎正弘:「能力別クラス編成による効果的な情報教育の実施について」(教育情報研究、2003、第19巻第2号、pp.17-26)